

## 翻訳で何が失われるか。---認知の問題を中心に

プリンストン大学 牧野 成一

言語は音/表記と意味が合体したのですが、翻訳では原語のもつ音と表記は失われて、意味だけが別の原語の音/表記に移されます。どんなに優れた翻訳者の翻訳でも失われるものは何か ---これに答えるのが私の講演の目的です。原音は詩のように音が大切な役割を果たしているジャンルの翻訳でも失われますし、表記もすべての翻訳で失われます。音と表記の喪失も認知的な問題ですが、日本文学が英語に翻訳される場合の認知的な問題を含んでいる代表的な日本語のシフト現象（数、時制、人称、フォーマリティ）についてお話しします。最後に、翻訳で失われるものは日本語教育とどう関わるのか、という問題についてもみなさんと考えたいと思います。

### 文献

- 大竹芳夫(2009) 『「の(だ)」に対応する英語の構文』くろしお出版
- 鈴木(2001) 『教養としての言語学』鈴木孝夫著作集 6. 東京：岩波書店
- 野田春美(1997) 『日本語研究叢書 19 ノダの意味・機能---関連性理論の観点から---』くろしお出版
- 東平福美(2010) 「複数接尾辞「タチ」 --- 認知対象の広がり」 期末レポート、コロンビア大学日本語教育修士課程
- 牧野成一(1983) 「物語の文章における時制の転換」 『月刊言語』 Vol.12, No. 12, 東京：大修館
- 牧野成一(1996). 『ウチとソトの言語文化学 ---- 文法を文化で切る』東京：アルク（絶版）
- 牧野成一(2007) 「認知世界の窓としての日本語の複数標示-タチ」 『言語学の諸相』(久野・牧野・ストラウス編), 109-130, 東京：くろしお出版
- Hopper, Paul J. (1979) "Aspect and Foregrounding in Discourse", *Syntax and Semantics*, Vol. 12. *Discourse and Syntax*. New York, Academic Press.
- Renovich, Omoto Sachiko (2000) "'YOU KNOW, I KNOW' Functions, Uses, and Acquisition of the Japanese NODA Predicate", M.A. Thesis submitted to the University of British Columbia, Vancouver, Canada.

---

\*\*\* 「日本語教育の新たな可能性:言語・コンテンツ・文化の統合翻訳で何が失われるか ---その日本語教育的意味」 (Journal CAJLE Vol.12、2011年夏出版予定) をご参照下さい。 <http://www.cajle.info/publications>